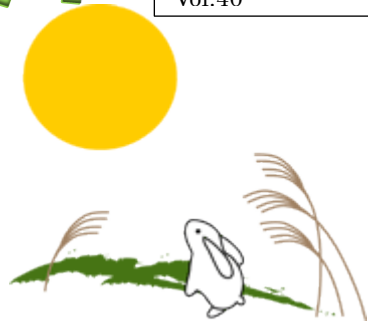


新生児の体温と保育器



成人の体温は無意識のうちに熱の産生と放散が行われ、常に一定の体温を保っています。たとえば寒さを感じるとふるえ、筋肉の収縮を増加させて熱産生をしています。逆に気温が高いときは、皮膚からの不感蒸泄（汗）、気道粘膜からの蒸発により熱を放散させ、体温を一定に保つように働いています。

新生児は成人のようにふるえによる熱の産生はできないため、寒さを感じると肩甲骨、脊柱、腎周囲に存在する褐色脂肪組織の脂肪を分解し熱の産生を行い、体温を一定に保とうとします。しかし、その熱の産生能力は低く、容易に低体温になってしまいます。また、新生児の体表面積は成人の3倍であることや、皮下脂肪が少ないため、熱の喪失が大きくなります。

このように、新生児の体温調節能力は未熟であり、小さな環境温の変化によって容易に低体温や高体温になりやすいのです。体温管理がうまくできないと、体重増加や発達・予後に影響する可能性があり、適切に保温することがとても重要です。

NICU(新生児集中治療室)では、保育器を使用し、保温しています。新生児の至適体温は、およそ36.5~37.5℃で、保育器の中の温度は、体温や体重など見ながら、それぞれの児の状態によって調整します。この保育器のなかで、数日~数ヶ月過ごし、すくすくと成長されるのを見守っています。



褐色脂肪組織の分布

Aherme,W.&Hull,D:The site of heat production in the newborn infant Proc,R.Soc.Med.,57:1172., 1964



ここで保育器の温度や湿度を調整します。



文責 新生児集中ケア認定看護師 栗原通子